

優良農家の紹介

洗練された都市農業経営～究極の低コスト軟弱野菜生産～

はじめに

住宅街に突如現れる緑のじゅうたん。阪神間の軟弱野菜は露地栽培が多い。都市農地は新鮮な野菜の供給だけでなく、緑地や防災空間としても貴重な存在である。西宮市荒木町で軟弱野菜の露地周年栽培を行い、産地のリーダーである吉村光晴氏を紹介する。

経営概要

年間労働力 本人・妻・母
 経営面積 53a
 経営作目 (ホウレンソウ106a、コマツナ101a、シュンギク53a)

吉村氏は1968年高校卒業後に就農。当時は70aの農地の半分に水稻を作付けし、ホウレンソウ、シュンギク、ミズナ、トリナ、カブ、ネギなどの軟弱野菜を栽培していた。軟弱野菜は1970年の大阪万博以降急激に需要が増え、軟弱野菜の専作経営に移行した。



図1 収穫作業



図2 洗浄作業

質な軟弱野菜生産を実現している。洗浄作業は動力噴霧器を活用し手早く洗い上げる。洗浄された軟弱野菜は保冷庫で予冷し、大阪の市場や阪神間の量販店に出荷している。1日の出荷数はおよそ800束(250g/束)である。

軟弱野菜の露地周年栽培は阪神間の都市農業を代表する経営類型である。露地栽培は、高温期でも収量性が高い、店持ちが良い商品が得られる、生産コストが低い、土壌に塩類が集積しにくいなどのメリットがある栽培方法である。しかし、気象条件や害虫の影響を極めて受けやすい栽培方法であり、安定生産するには卓越した技術が必要である。吉村氏の年間出荷目標の最低ラインは20万束である。都市の優位性を生かし、大型の農業機械・施設を必要としない露地軟弱野菜生産は、究極の低コスト経営を実現している。

将来に向けて

都市農業も、バブル景気とその崩壊、阪神・淡路大震災、そして現在の世界同時不況と多くの荒波を受けてきた。「大震災では大きな被害を受けたが、生命産業としての農業の役割を再認識することができた。今、就農以来野菜を作り続けてきて本当に良かったと思っている。これからも都市農業の素晴らしさを市民に、そして後継者に伝えていきたい」とホウレンソウを束ねる手を緩めて語ってくれた。

高松 雅一 (阪神農業改良普及センター)
 (問い合わせ先 電話: 079-562-8861)

輪作体系

年間を通して収穫を途絶えさせない計画的な種、品種選定が行われている。右図は、2007年の作付事例である。連作障害を回避するため、同一品目の3連作にならないよう作付されている。品種選定は、作業性、耐病性、収量性、低温伸長性などが重視される。

栽培技術

年間5回転と高度に土地を利用するため、地力の消耗が激しい。そのため、土づくりが重要視され、10a当たり年間施用する堆肥の量は3.8tに上る。また、シーダーテープの利用、かん水チューブ・スプリンクラーによるかん水、季節に応じたべたがけ資材の活用などにより、省力かつ高品

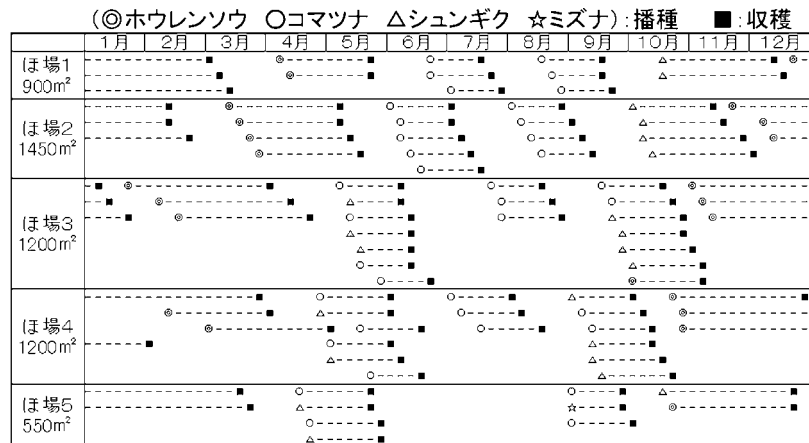


図3 2007年作付実績